

アルファベットの面的表現とその変形

Planar expressions of alphabet and their variations

遠藤 牧人

ENDO Makito

Today, in printed matters, many kinds of typefaces having systematic beauty can be found. Yet they cannot always visually express the writer's characteristics and emotions adequately. For the past several years, I have tried to express emotional elements by typography, which is difficult to accomplish with the existing typefaces. In my work, I decided to treat typefaces as plans, not as lines. In my research, I came to develop some typefaces which are less systematic than the existing typefaces, and that change their faces emotively according to each situation. This paper introduces two named "Helvetica in Peephole" and "CHEERFUL PRANES"

書体に積極的に面積を与え、
場面に応じて表情を変える文字組を試みる

印刷物のなかに日常的に見られる書体を使った文字組は、手書き文字にはない整然とした美しさを獲得している。しかし、常に一定の形を保ち、場面に応じて表情を変化させることのない多くの既存の書体では、書き手の個性や感情は、必ずしもうまく視覚化されているとはいえない。

絵画のなかには、人間の内面的な世界を見事に視覚化した著名な作品が数多くある。文字でもそういったものを視覚化できないだろうか。内容を読まなくても文字組だけで、視覚的にある程度まで、内面的な世界を見せてしまうことができないだろうか。

ここ数年、私は、既存の書体では表現しにくいエモーショナルなものを、タイポグラフィで視覚化する方法を模索してきた。同じ書体の“A”でも、怒りを込めた“Anger”の“A”と鼻歌混じりの“Amuse”の“A”には、異なる表情を持たせたい、というのが私の狙いである。

そこで今回、私は、音やリズムなど言葉のエモーショナルな表現を、場面に応じて変形する自由度の高い書体（またはそれに準ずるもの）を用いて、一定の法則のもとに視覚化する作業に着手した。

発想のポイントは、線の集積である文字を、面の集積として捉え直し再構築するところにある。既存の書体は、立体的なものも含め、その多くが線の集積とし

て認識されやすい。たいていの書体は制作過程で「塗りつぶす」という面ならではの作業を含んでいる。しかし、デザイナーにその意識は希薄であり、多くの場合、「太い線を描く」域を出ていない。まず「文字は線の集積である」という概念を拭い去ることから始めようと考えた。

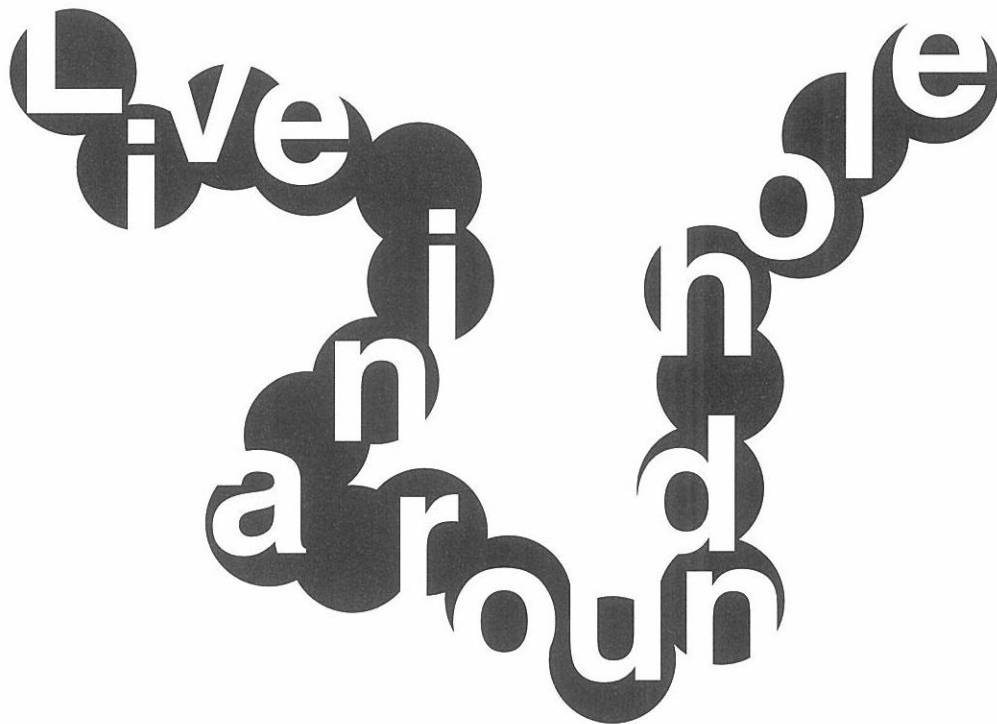
文字を面として捉えることにこだわった理由は、線的な文字を変形させると、同一の書体として認識されにくいからである。たとえば直線は同じ太さと長さを持っていても、回転するだけでかなりイメージが変わる。水平な直線は静けさを感じさせるが、それを垂直に立てたとき、斜めにしたとき、最初の印象は持続しない。ましてや直線と曲線、開いた線と閉じた線では、全く別物として知覚されてしまう。詳細な実験はこれからだが、書体を線の集積として見る限り、変形して表情を与えることは難しいのではなかろうか。

その点、面的な形は線的な形と比べ、視覚的にかな

り安定した存在といえそうである。三角形は、1つの角が限りなく0度や180度に近づき1本の直線にならない限り、三角形として知覚され、三角形固有の鋭い印象を保ち続ける。また、たとえ辺が2本しかなくても、その間の角が90度以下であれば、その図形は三角形として知覚されることが多い。円に至っては回転してもその痕跡を残さないし、かなり潰しても円らしく見える。日常生活の中で私達が円として知覚している物の多くが、実は、網膜上では楕円として定着されているのである。

今回は、手始めに試作したなかから、2種類の欧文による面文字表現を紹介する。研究はまだ始まったばかりである。

Live in a round hole 29.7×42 cm



Helvetica letters are products of lines. But when they are thrown into circles, they become planes. And when these planes make words, they become a line. Makiko Endo.1994.

ヘルベチ隠れーる

これは、Helvetica Boldの一部を円で切り取って円内をネガにした表現である。大きさの比率は、100ポイント(35.14ミリ四方)の文字に対して直径24ミリの円となっている。この比率だと、すべての大文字は円のセンターに置いて円の外にはみ出す。

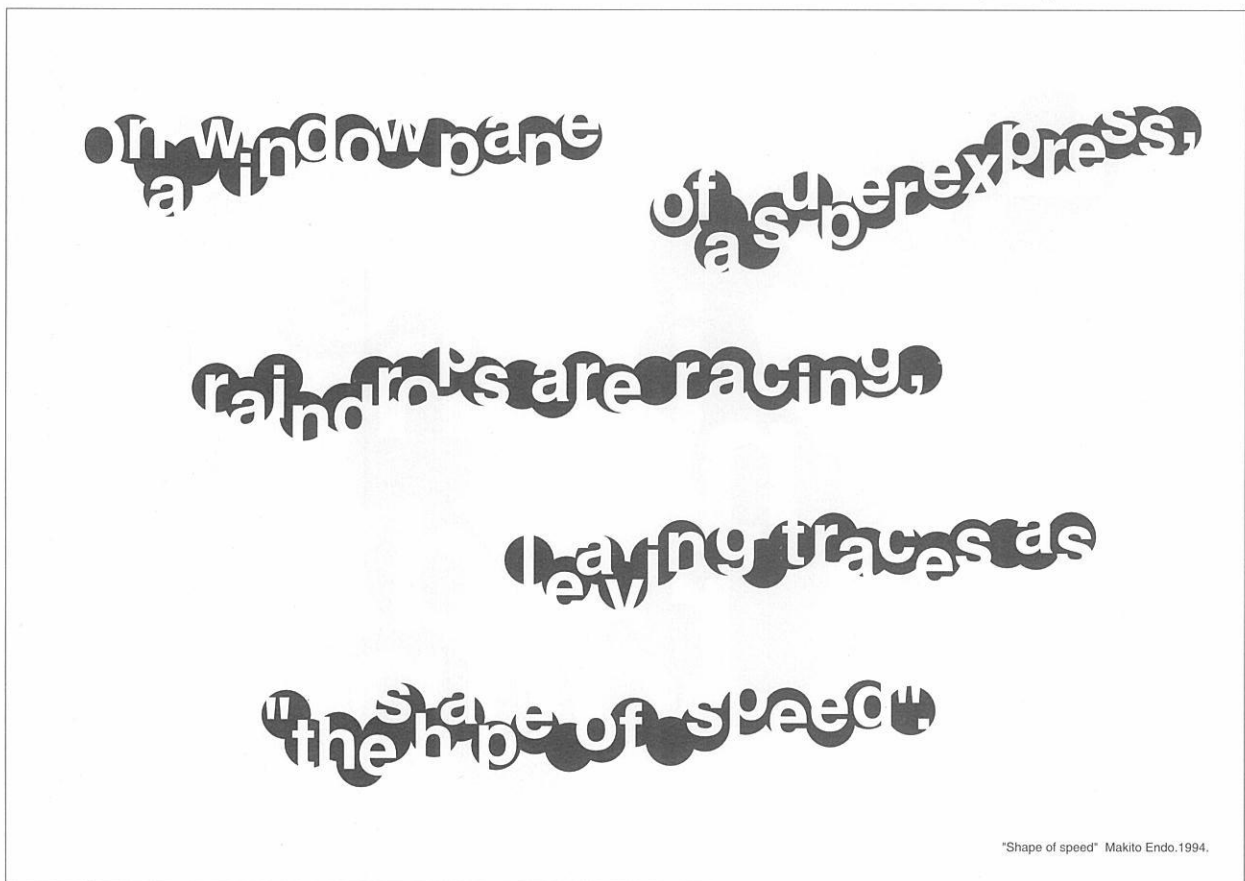
もっとも重要な点は、ご覧のように文字の一部が円の外にはみ出すことによって、文字と円が同化することにある。文字の一部がはみ出さない限り、文字は円と別個の物として知覚され、相変らず線的なものとして存在し続けるからである。この同化した図形は、部分的に欠けた一つの円として知覚されながらも、文字としての痕跡を残し、文字として判読できる。

Helvetica Boldを選んだ理由は次の3つの理由による。それは、ネガにしたときのバランスがいいこと、ポピュラーかつシンプルな書体で一部分を見ただけでどの文

字か判別できること、そして、文字幅の変化が少なく円に収まりがいいことである。組み合わせる図形に円を選んだのは、円の輪郭が常に一定でどこをとっても変化しないことにある。一定の輪郭は、文字でかなり切り取られても、相変らずその図形を円として知覚させる働きをする。そして、円の中でかなり文字が暴れ回っても、同一の「書体らしき物」として知覚させるのに貢献する。三角形や四角形ではそうはいかない。

「ヘルベチ隠れーる」では、文字は判読できる範囲で上下左右に自由に動き回れるが、特別な場合を除いて、回転運動は禁則とする。これを許してしまうと、途端に文字としての情報量が減ってしまい、文字の見える部分をかなり多くしないと判読できず、多くするとグラフィカルな面白さは半減する。当然のことながら、Helvetica本来のベースラインは無視される。よって、上下斜め方向を含むかなり自由な文字組が可能となるが、それに伴い二次元的で独特のスペーシングが要求される。

Shape of speed 29.7×42 cm



"Shape of speed" Makito Endo.1994.

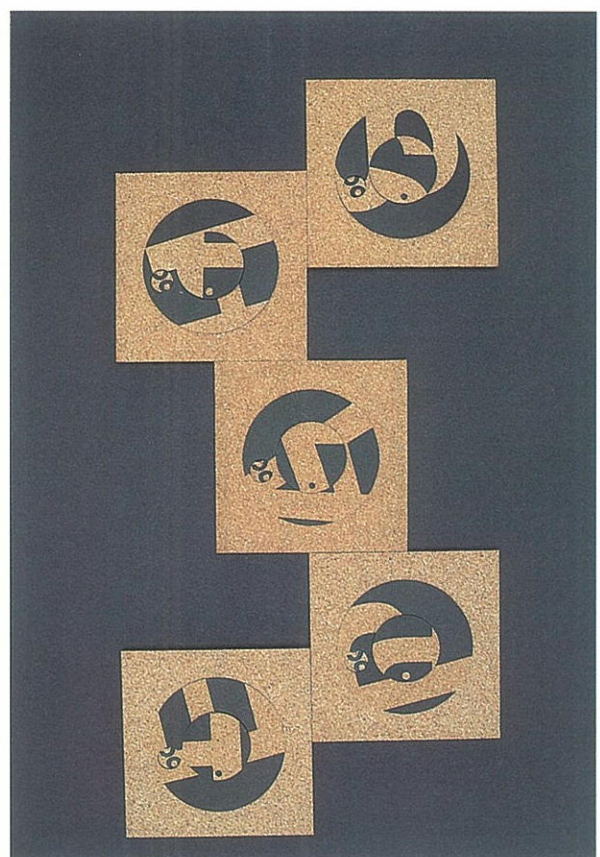
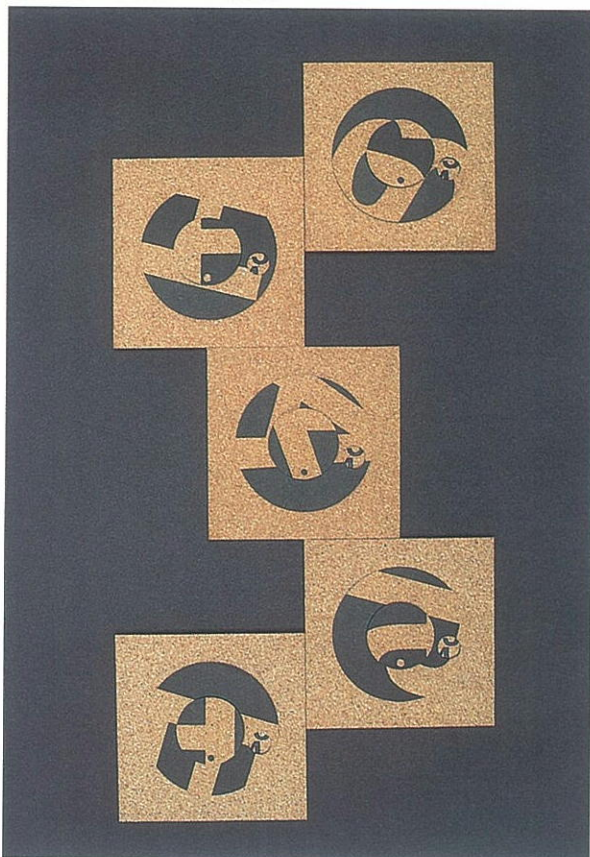
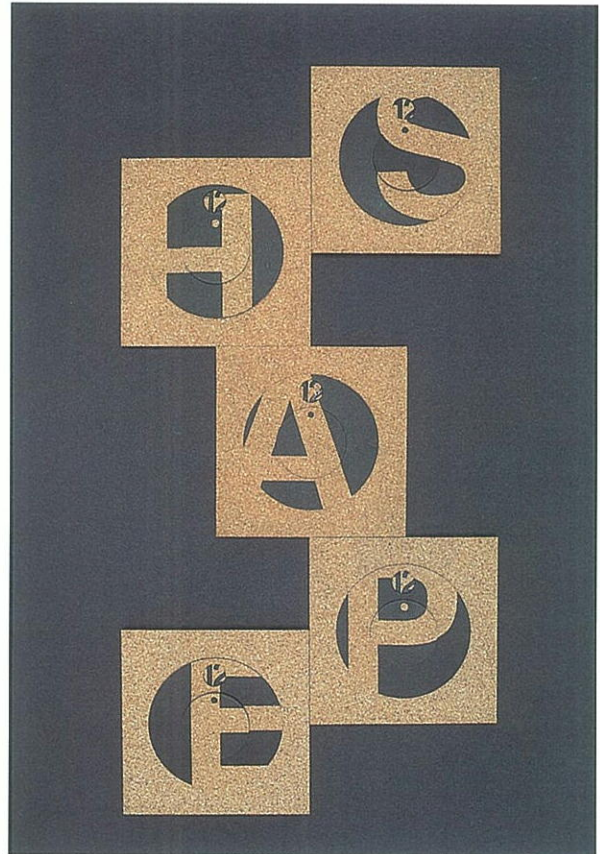
私は Helvetica Bold という素晴らしい書体を元にこういう文字表現に至った。かなり小さな部分だけを切り取っていても文字としての情報と美しさを失わない Helvetica Bold には、改めてその完成度の高さを見せつけられる。望遠鏡で覗いた素敵な星を写真にとって並べたら、新しい美しさを発見した、というような気分である。円と戯れる Helvetica Bold をある瞬間で面として切り取り、それをいくつか並べて言葉にしたとき、今度は今までの線的な表情とは違う、生きた線としての動きが見えてくる。

“Shape the time” 時を形作る5つの時計

22.4 × 22.4 × 3.2cm × 5個

「ヘルベチ隠れー」を使った5つの時計。外側の大きな円が時針。円窓の中に文字盤上の1～12までの数字が「ヘルベチ隠れー」として現れる。内側の小さな円は分針で、点の位置で分を読み取る。円の中で踊る書体はまず、ある一瞬でデザイナーに切り取られ、そのあと今度は時間の力で、場所によって異なる2種類の回転運動を与えられ、分解・再生を繰り返す。そして1日に2回だけ「形」が成立（正立！）する。時計は時間を形にする。時間も時計を「形」にする。ちょっと不思議な地と図の関係。

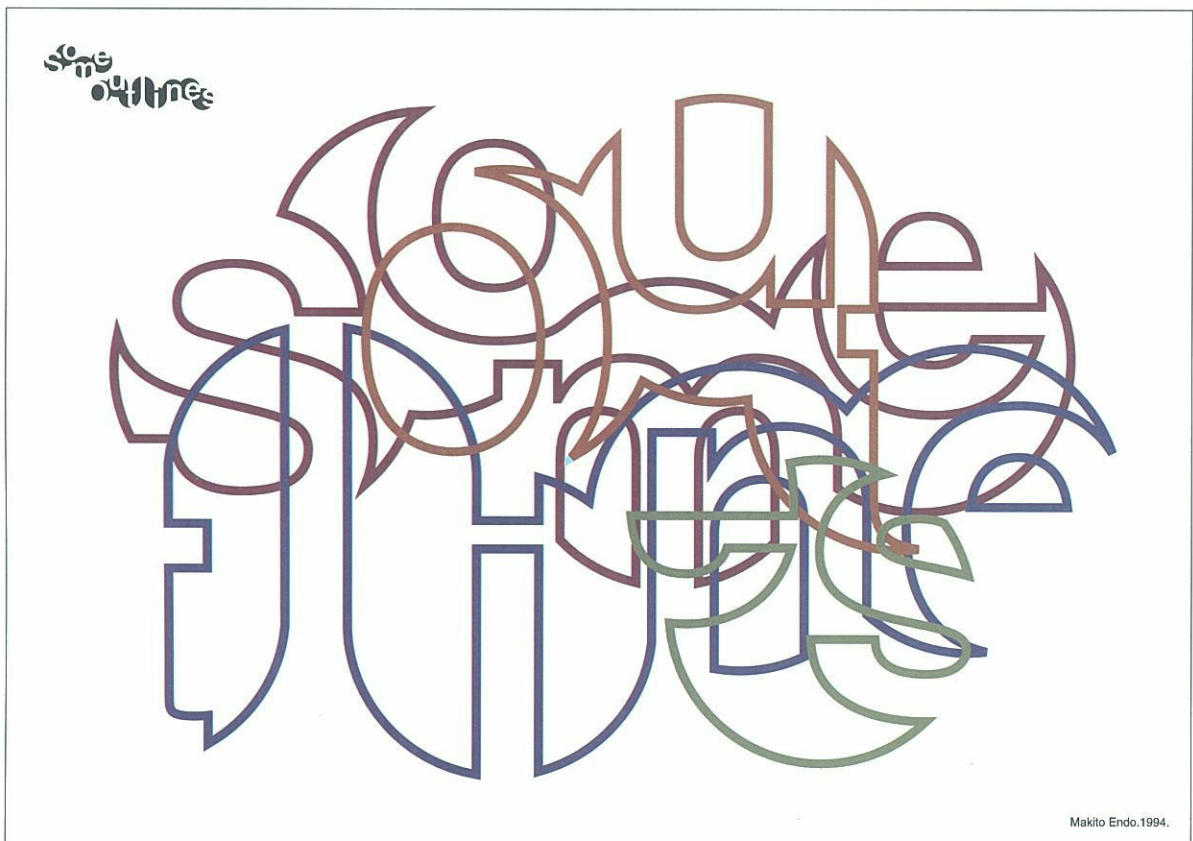
→12:00 ↓3:30 ↘8:30。





Some outlines <1> 29.7 × 42 cm

Some outlines <2> 29.7 × 42 cm





CHEERFUL PLANES 29.7×42 cm

CHEERFUL PLANES

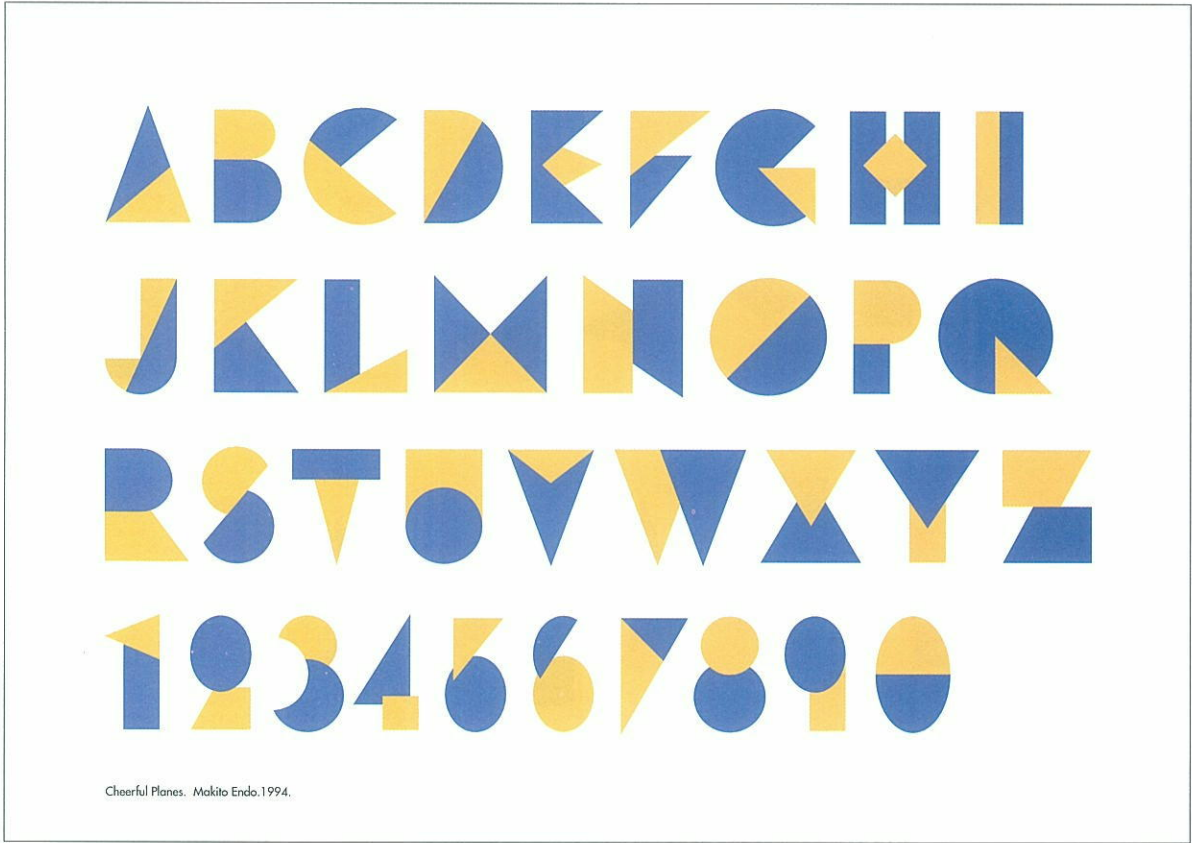
私はこの書体をアルファベットをモチーフにした抽象絵画として位置づける。

漢字を見慣れている我々日本人は、文字を部首に分解することに抵抗がない。アルファベットでもそれができないか？と考えたときに、幾何学的な面の図形でそれらしく分割するアイデアが生まれた。書体のイメージは Futura Light をベースにしている。自由曲線を排除したこの書体のイメージを、ここでは幾何学的な図形で抽象化し再構成してみた。

書体の基本形は次のページの見本のとおりである。分解して変形することを前提としているので、1つの文字が2つ以上の図形から構成されており、それぞれ

に別々の2色が塗り分けられている。動きを強調するためには選ぶ2色は補色であることが望ましいが、表現する言葉によってはそれにこだわらない。文字を構成するどの図形にどちらの色を与えるかは、文字の前後関係によって決定する。実際に分解してみると、それぞれのパーツの形は変わらないので、かなりずらしたり回転させたりしても文字として判読できる。

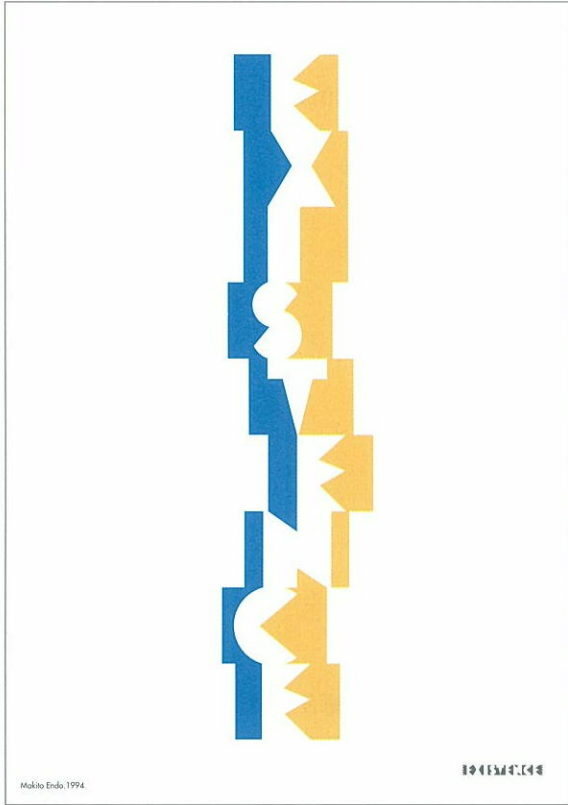
この“CHEERFUL PLANES”をアウトライン化したのが、“CHEERFUL PLANES OUTLINE”である。アウトライン化しても面としての表情を保ち続け、かつ十分に判読できる設計になっているのが、この書体のもう一つの特長である。しかし、これをベースにいろいろな発想が膨らんでくるとは、制作前までは自分でも予想していなかった。



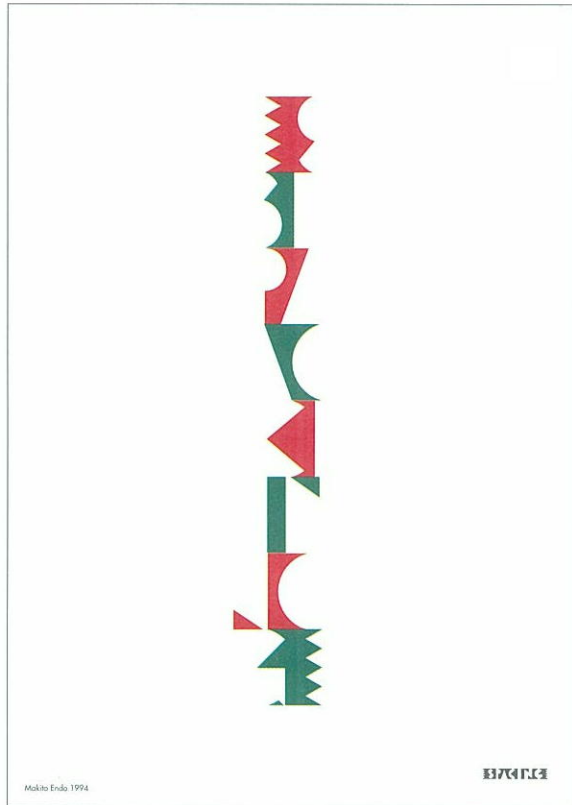
Cheerful Planes 29.7 × 42 cm

Cheerful Planes Outline 29.7 × 42 cm





Existence 42 × 29.7 cm



Spacing 42 × 29.7 cm

Divide 29.7 × 42 cm

